

ヨッタム王の子は アカズ王、

アカズ王の子は ヘゼキヤ王、

10 ヘゼキヤ王の子は マナツセ王、

マナツセ王の子は アモス王、

アモス王の子は ヨシヤ王、

11 ヨシヤ王の子は、「イスラエルの民が戦に敗れ、^{はる}遙かなる異国」①バビロンに流された頃に生まれたイエコニア王とその弟たちでござる。

12 バビロンに流された後、

イエコニア王の子は サラテール、

サラテールの子「バビロンから帰る民の指導者」②ゾロバベル、

13 ゾロバベルの子は アビウデ、

アビウデの子は エリヤキム、

エリヤキムの子は アゾル、

14 アゾルの子は サドック、

サドックの子は アキム、

アキムの子は エリウデ、

15 エリウデの子は エレアザル、

エレアザルの子は マツタン、

マツタンの子は ヤコブ、

16 ヤコブの子は マリアの夫、「大工」ヨセフでござる。

このマリアから、お助けさまと呼ばれているイエシューさまがお生まれなされた。

17 かくして、すべてを合わせれば、アブラハムからダビデ王まで都合③十四代、ダビデ王からバビロンに流されるまで十四代、バビロンに流されてからお助けさままで十四代ということに相なつてござる。

二・イエシューさまのお生まれ

参照 ルカ 1 26、38、2 1、21

18 お助けさまなるイエシューさまがお生まれなされた次第は、今から物語る通りでござる。

イエシューさまの母御前マリアは、その頃ヨセフ

と許嫁の間柄でござった。^{いいなすけ あいだがら}

この国では婚約調え^{ととの}ば法の上ではすでに妻でござる。

ところが、いまだヨセフと一緒にならぬというに、あろうことかマリアの腹にお子がいるということが知れ申した。実を申せば、これこそは、神さまの尊^{たつと おんいさ}い御息がかかつて孕^{はら}んだお子でござった。

が、神ならぬ身のヨセフにはこのことの知れようはずもござらぬ。国の掟^{おきて}に従えば、かかる姦婦^{かんぶ}は不義^{ふぎ}の相手もろとも石打ちの極刑と定められてござる。ところが、

19 夫となるべきヨセフというお人はまことに俠氣^{おとこぎ}のある心やさしい男でござった。それで、マリアの不始末^{ふしまつ}を表沙汰^{おもてきた}にしてことを荒立て、むごい仕置^{しお}きを致すことは避け、なろうことなら内々に別れてや

りたいものだ^ちと、²⁰ 腹は立てども千々に心を傷めてあらぬ手だてを考えていた折^おりも折、御覽あれ、神さまからの①み使いがヨセフの夢枕^{ゆめまくら}に立つて、このように語りなされたのでござる。

「ダビデ『王家』の血筋に連なるヨセフよ。懸念^{けねん}は無用^{むよう}ぢや。憂うることなく、マリアを妻に迎えよ。

マリアの腹におわすお子は、恐れ多くも神さまがその尊い御息を吹きかけなされて、孕ませたるお子である。²¹ マリアは男のお子を産む。そのお子を②イエホシューアとお名づけ申せ。このお子は、やがて己^{おの}が国民^{くわんにん}をその過ちから助け出^{いだ}そうほどに。」

²² かかることの起きたのはすべて、「神さまの御言葉^{みことば}を授かりて民に伝えた、かのいにしえの」③御言持^{みことば}ち「イザヤさま」の口を通して語られた、我^{われ}らが④御^{おん}あるじなる神さまの御言葉が世に成ろうとてのこと^{こと}でござった。

「²³ 見よ。娘、孕みて男子^{おのこ}を産まむ。その名は『神共^{かみとも}』。」

すなわちこれは、「恐れ多くも神さまが我らと共に
におわします」との意でござる。

24 ヨセフは夢から覚めるや、我らが御あるじなる
神さまのみ使いに言われた通り、マリアを妻に迎え
たのでござるが、25 男のお子が生まれるまでは、妻
と枕を交わすことはござらなんだ。かくて、そのお
子のお名をイエホシューアとおつけ申した。

とは言え、このお子は後に天離るガリラヤ
の舌訛したたみたる鄙ひなにてお育ち遊ばされしほど
にイエホシューアさまと呼ばれることなく、
かの地の訛なまりにてイエシューアさまとは呼ばれ
ることと相なつたのでござる。

●第二章

三 星占い師、来る

「イエシューさまは、①ヘロデ王の御代にユダヤ
の国はベツレヘムなる村にてお生れなされてござる。

その頃、御覽あれ、②星を読む占い師どもが東の
方より③ヒエロソリユマ（イエエルサレムの雅名）の都に
やつて来て、2 申すには、

「ユダヤ人を取り仕切るべくお生まれなされたお方
は何処いずこにおわしましょうや？ やつがれどもはめで
たき徴しるしの星の空に昇るを見て、そのお方を拝みに
参上致してござりまする。」

3 これを聞いたヘロデ王は怖氣おぞけを震い、

心の中でこう思った。

「余こそこの国のあるじたるに、かかる
曲事くせことを申すとは不埒ふち千万。さては余が御位みくらい

子はアビヤ、アビヤの子はアサ、⁸アサの子はヨシャファト、ヨシャファトの子はヨラム、ヨラムの子はウジヤ、⁹ウジヤの子はヨタム、ヨタムの子はアハズ、アハズの子はヒゼキヤ、¹⁰ヒゼキヤの子はマナセ、マナセの子はアモス、アモスの子はヨシヤ、¹¹ヨシヤの子は、バビロンへ移住させられたころの、エコンヤとその兄弟たちである。

¹²バビロンへ移住させられたのち、エコンヤの子はシャルティエル、シャルティエルの子はゼルバベル、¹³ゼルバベルの子はアビウド、アビウドの子はエリアキム、エリアキムの子はアゾル、¹⁴アゾルの子はサドク、サドクの子はアキム、アキムの子はエリウド、¹⁵エリウドの子はエレアザル、エレアザルの子はマタン、マトンの子はヤコブ、¹⁶ヤコブの子はマリアの夫ヨセフであり、このマリアによる子が「キリスト」と呼ばれるイエスである。

¹⁷こうして全世代は、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロン移住まで十四代、バビロン移住から「キリスト」まで十四代である。

「けがれた罪の子」 イエス(救い主)の誕生(ルカ2・1-7)

¹⁸「キリスト」イエスの誕生の次第はつぎのとおりであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がいっしょになるまえに、聖霊によって子をやどしていることが明らか

になった。19 夫ヨセフは正しい道をつらぬく人だったので、マリアのことを表ざたにするのをぞまず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20 ヨセフがそのような思いでいたとき、主の使いが夢にあらわれて言った。「ダビデの子孫ヨセフ、妻マリアを迎え入れることを、おそれるな。マリアが身ごもったのは、聖霊によるのである。21 マリアは男の子を生む。その子をイエス(救い主)と名づけなさい。その方が民を道のあやまりから救われるからである」。22 このことはすべて、主が預言者をつうじて言われていたことが実現するために、起こったのである。

23 『見よ、おとめが子をやどし、男の子を生む。』

人はその子をインマヌエルと名づける』(イザヤ7・14)

これは「神はわれわれとともに」という意味である。24 ヨセフは眠りから覚めると、主の使いが命じたとおりに実行した。妻を迎え入れ、25 男の子が生まれるまで、妻との交わりをもつことはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。

最初の訪問者は、貧しい不毛の「東の地」からの占い師

2

イエスは、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムで生まれた。ちょうどそのころ、東のほうから占い師たちがエルサレムにやって来て、2 「お生まれになったユ

天使、ヨセフに語り給う

(マタイ福音書一章一八―二五節)

集會場にて。テレシータが福音書を朗読し、さて、私たちは最初の句から討論した。

イエス・キリストの誕生の次第は、次のようであつた。母の MARIA はヨセフと婚約していたが、彼らが同居するより以前に、聖霊によつてみごもるという事態が生じた。彼女の夫、ヨセフは敬虔であつたので、彼女をはずかしめようとはしなかったが、ひそかに離別しようと考えた。

パンチヨ このヨセフという男はいい人だね。MARIA の悪口を言わず、彼女と渡り合つたりしないし、暴力をふるつたりもしなかった。ヨセフは MARIA を辛い目に合わせたくなかつたんだ。

マルセリーノ ヨセフはきつと苦しんだらう、と俺は考えざるを得ない。だって、彼は MARIA を愛していたんだからね。彼女は自分の花嫁で、彼らはまもなく結婚しようとしていた。ちょうどその時、ヨセフは彼女が彼を裏切っていたことが解るんだから。彼はきつとひどく嫉妬したに違いない。このような場合、大抵の人間は、彼女に復讐して自分の男らしさを示さなければ、と思ひ込んでしま

う。多くの男は妻を殴り殺してしまったりもする。しかしヨセフはそうしないで、この女性が彼にふさわしくないと考え、秘かに苦しんでいた。

彼がこうしたことを考えていたとき、突然、夢の中に主の天使があらわれて、こう言った。「ダビデの子孫ヨセフよ、恐れずマリヤをあなたの妻としてむかえよ。なぜなら、彼女から生まれる子は聖霊によるものだからである」。

アレファンドロ ヨセフは天使が彼に語ったことを信じたのだから、神を多いに信頼していたんだ。恐らく他の男だったら、こんなに早く事情を飲み込むことはできなかっただろう。

テレジータ 彼はマリヤさまにも大きな信頼を置いていたんだわ。神さまに対してだけじゃなくて。彼は、マリヤさまが善良な女性であることを知っていたのよ。だからこそ彼は、天使を通してこのことを告げた神をこんなに素早く信じたんだわ。

ナターリエ マリアさまの子が、多くの人間を解放することになる救世主になると聞いて、彼は喜んだのよ。それで彼は、この子を自分の息子として喜んで受け入れたんだわ。

ホセ・エスピノーサ だが悲しみもあったさ。人間たちが解放されようとする時には、苦しみも存在することなんだから。彼にはもう、何が彼の息子を、彼の家族を待ち受けているか、解っていないんだ。そして彼はそれを承知した。しかし、彼だってさんざん考えただろう。天使は言った。「マ

リアをめとることを恐れるな」と。彼がマリアと結婚した時、彼はまた、救世主の義父になるという責任も引き受けたんだ。そして、僕が言っているこのことは、決してそんなに簡単なことじゃない。アレファンドロ これは、息子たちや娘たちがこの共同体を弁護すると不安になる、多くの父親たちに対する教訓でもあるんだ。なぜなら、ここにいる青年たちだって、一種の救世主みたいなもんだからさ。というのは、皆が皆、恐らく他の人々のために受けなければならない危険をわが身に引き受け、その危険にさらされているということなんだから。そして恐らく、その父親たちだって、彼らのために苦しまなければならない。しかし、父親たちは、ヨセフと同様、恐れることはないんだ。

彼女は子を産むであろう。その子をイエスと名づけなさい。なぜなら、その子は、彼の民をその罪から救うからである。

ホセ・シャヴァリーア 私たちが見て来たように、イエスとは解放者、あるいは解放を意味するわけですね。むしろユダヤ人たちが、政治的な解放者を待ち望んでいたにもかかわらず……。私が尋ねた。——じゃあ、イエスは政治的な解放者だったんだろうか、それともそうではなかったんだろうか？

ホセ・シャヴァリーア いや、政治的な解放者ではなかったでしょう。天使がヨセフにはっきり言っている。「彼は、彼の民を罪から解放するであろう」と。

マルセリーノ 俺はそれには賛成できない。キリストは、俺たちを圧迫から解放するために来られたんだから、政治的な解放者だよ。なぜなら、罪から解放されるということは、人々をエゴイズムから解放するということを意味している。すべての人間がお互いに愛し合うようになる、ということだ。人間がお互いに愛し合えば、もはや圧迫ということは存在しなくなる。だから、キリストは政治的な自由を俺たちにもたらすために、やって来られたんだ。

ホセ・エスピノーサ 解放が必要だということは、不正があるということだろう。そして不正があるということは、また、罪があるってことなんだ。罪と不正とは同じものなんだよ。

私が言った。——キリストによる解放は、私には政治的でもあったと思われるんだが、それはユダヤ人たちが望んでいたものとは別のものだった。彼らが望んでいたものは、実際の解放ではなかった。つまり、それは力を持つ救世主で、何かもっと違った王のようなものだったんじゃないだろうか。実際の政治的解放というものは、ひとつの罪からの解放なんだからね。——あるいは同じような不正からの解放かな。

これらのことはすべて、預言者たちによって主が仰せられたことを実現するために起こったのである。「見よ、処女がみごもって、ひとりの子を生むであろう。そしてその子の名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。インマヌエルとは「神がわれわれと共においでになる」ということを意味するものである。

マヨリと。ここで救世主に与えられる名前は、「神は貧しき人々とともにある」であるべきなんじゃないだろうか。なせなら、貧しい人々と金持たちの世界は分断されているんだから、救世主は双方の側に立つことはできないし、彼が一方の側に立つとすれば、彼たちの側、すなわち貧しい人々たち側に立つことになる。

オリウイア 当然海門のことよ。神さまは貧乏人たちと金持たちの両方に、同時に一緒にいることはできないわよ。どうしてって、ひとりの人間だって、同時に神さまと宮に仕えることはできないわけでしょう。

眠りから醒めたヨセフは、主の天使が彼に命じた通り、マリヤを妻として迎えた。そして彼は、彼らがイエスと名づけた子をマリヤが産むまで、彼女に触れなかった。

ラファエル ここで最も大切なことは、ヨセフがいかに救世主の父となることに同意したかを理解することでしょう。彼はこの解放の業に参加することに同意したんだ……。

オスカール 僕にとって大事なことは、ヨセフがひとりの大工だったってことだ。すなわち、民衆のひとり、僕たちのような人間のひとりだったってことだ。そしてイエスは、後にそのことで非難される。貧しい人々の子であったということ、彼は非難される。彼が貧しい人々の子だから、人々に

何も与えることができないと、人々は思っていた。

アレファンドロ　今だって、町じゃあ、奴らは同じことを言うだろう。百姓の息子、煉瓦職人の息子、酒場女の息子に過ぎないじゃあないかって……。

フェリオ　なぜ、貧乏人は何も言うことがないって、彼らは信じてるんだろう。イエスは人々に、貧しい人々からも何かを学ぶことができるということを示したのに。そしてイエスはまた僕たちに、解放は貧しい人々から来るということを教えたのに。

フェリペ　この世界は、神がこの世界をお割りになって以来、貧しい者と富んでいる者とに分けられてしまっている。

私は言った。――私なら、神がこの世界をお割りになって以来、そのようであったとは言わず、むしろ人間たちが社会というものを組織し始めて以来、こうなったと言うだろうな。すなわち人間たちは社会を誤って組織したのさ。神はすべての人間を平等に創られたのに。

オスカール　だから、この世界は論理的な方法ややり方で組織されなければならないわけだろうか？ 皆が平等な動物たちのように。たとえば、僕は鳥たちを見る。彼らはそれぞれ違っていて、異なった能力を持っているけれど、色鮮やかな鳥だからといって、他の鳥たちが、そのためにその鳥をくいのものにすることはない。僕たち人間だって、そうあるべきだと神は欲されていると、僕は思う。だからこそ解放者が必要なんだ。だから、「僕たちと共にある神」、イエスが来られたんだ。

ラウレアノ　ここには、「そこでヨセフは目覚めて」と書かれているけれど、ということはヨセ

「は眠っていたんだらうか？ 彼はただこれらすべてを夢に見ただけで、実際に天使がヨセフに話しかけたのではないんですね？」

「夢か、あるいは幻覚^{ヴィジョン}だったのではないだらうか、と私は言った。あるいはヨセフは何か他の方法でこれらすべてのことを理解したのだと思う。聖書では、彼に話しかけたのは天使であった、と表現されている。そしてこの天使が、今日でもなお私たちに話しかけているんだね。」